

高城隆一

(東京大学大学院/日本学術振興会特別研究員/国立国語研究所)

taki.ryuichi.0816@gmail.com

【要旨】鹿児島県大隅半島東部で話されている内之浦方言の閉音節が音韻論的に2種類に区分できることを示し、内之浦方言において音節量の変化が進行中であることを主張する。内之浦方言のアクセント体系を観察すると、アクセント単位である拡張語(=語+0個以上の接語)の最終音節が閉音節であり、尾子音が共鳴音の /n, j/ である場合には最終音節内部で下降する型が観察されるのに対して、尾子音が阻害音の /t, s/ である場合にはこの型が観察されない(高城 2020a, b)。Hayes (1995: 120) が述べるモーラを担わない尾子音を認め、前者は尾子音がモーラを担う重音節であり、後者は尾子音がモーラを担わない軽音節であると分析する。

最終音節の尾子音が共鳴音である場合に観察されるアクセント実現の揺れから、アクセントの位置を数える単位がモーラから音節へ変化している可能性が指摘できる。これは九州西南部方言に見られる音節を基調とする体系が、モーラを基調とする体系から生じたものであるとする窪菌(2019)の仮説からも支持される。

1. はじめに

本発表では、鹿児島県肝属郡肝付町内の旧内之浦町中心部(図1)の伝統方言(以下、内之浦方言)の閉音節が音韻論的に2種類に区分できることを示し、内之浦方言において音節量の変化が進行中であることを主張する。内之浦方言では尾子音として閉鎖音 /t/、摩擦音 /s/、鼻音 /n/、接近音 /j/ の4つが現れる(高城 2019, 2020a, b 参照)。語末で対立する子音のミニマルペアを(1)に示す。1段目に音声表記、2段目に音素表記、3段目に意味をそれぞれ示す(以下でも同様)。

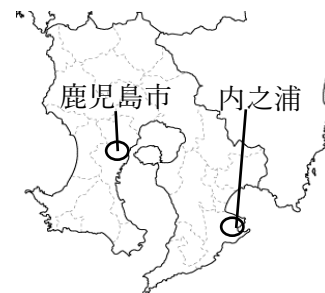
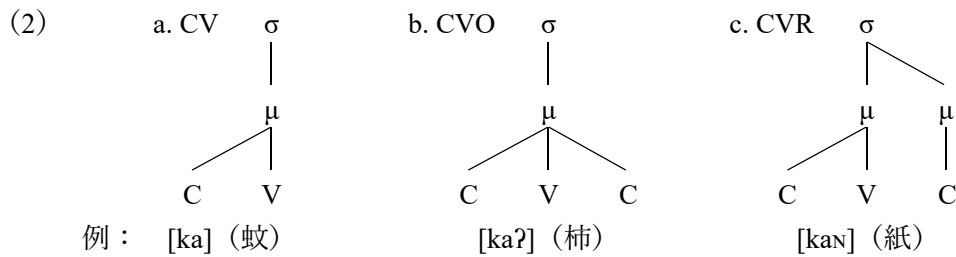


図1 九州南部の地図

(1)	a. aʔ	b. aɕ	c. aN	d. aj
	at	as	an	aj
	秋	足	あの	あれ

後述するアクセント体系の観察に基づくと、尾子音が(1a, b)のように阻害音の /t, s/ である場合(以下、CVO音節)と(1c, d)のように共鳴音の /n, j/ である場合(以下、CVR音節)とでは音韻論的な振る舞いが異なる。本発表では Hayes (1995: 120) が述べるモーラを担わない尾子音を認め、下記の(2a)のような短母音の開音節(以下、CV音節)と同じ振る舞いをするCVO音節を**尾子音がモーラを担わない軽音節**(=2b)であると分析する。一方でCVR音節は**尾子音がモーラを担う重音節**(=2c)である。以下でσは音節、μはモーラ、Cは子音、Vは母音、Oは阻害音、Rは共鳴音を表す。

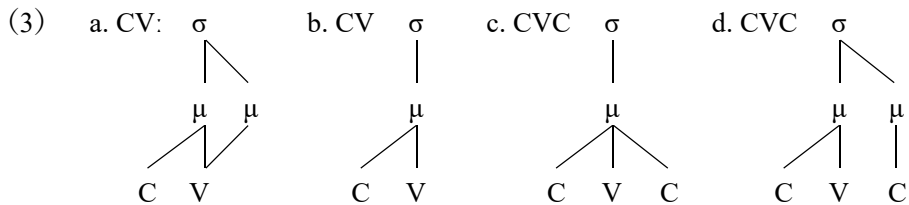
¹ 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」および、JSPS 科研費 17H02332、20J22969 の助成を受けたものである。調査にご協力いただいた内之浦の皆様へ感謝申し上げます。本発表の内容は木部暢子、窪菌晴夫両氏との議論から着想を得た。以下の方々からも貴重なご意見および情報をいただいた：青井隼人、占部由子、小西いずみ、山岡翔、山本恭裕(敬称略)。



第2節では音節量に関する先行研究を整理する。第3節では内之浦方言のアクセント体系の観察に基づいて、閉音節が CVO 音節と CVR 音節の2種類に音韻論的に区分できることを示す。第4節では内之浦方言の音節量についての共時的分析と通時的分析を提示し、第5節で結論を述べる。

2. 先行研究

Hayes (1995: 120) によると、一般的に長母音を含む音節 (=3a) は重音節であり、CV 音節 (=3b) は軽音節である。これに対して閉音節 (=3c, d) の軽重は言語によって異なる。さらに同一言語内においても同じ構造の音節が音韻論的現象に応じて、軽音節 (=3c) としても重音節 (=3d) としても振る舞う場合があるという。



Hayes (1995: 120) を一部改変して掲載。

ある尾子音がモーラを担うとき、それより聞こえ度の高い尾子音もモーラを担うという通言語的傾向があることが知られている (Zec 1995: 154)。(1) に示した内之浦方言の4つの尾子音に聞こえ度の階層を想定すると、(4) のようになる。(4) では、より左側に位置する子音ほど聞こえ度が高く、より右側に位置する子音ほど聞こえ度が低い。

(4) 接近音 /j/ > 鼻音 /n/ > 摩擦音 /s/ > 閉鎖音 /t/

第3節で詳述するように内之浦方言においてモーラを担う尾子音は接近音と鼻音の2つである。一方、同じく尾子音に立つ摩擦音と閉鎖音はモーラを担わない。これは上述の通言語的な傾向にも矛盾しない。

窪菌・本間 (2002: 24) は、Zec (1995) の研究に基づいた諸言語の分類を示している (=表 1)。表 1 でNは「流音や鼻音」を意味するとされている。

表 1 窪菌・本間 (2002: 24) による諸言語の分類

言語タイプ \ 音節タイプ	A	B	C	D
CVV (e.g. [kai], [ka:])	2 モーラ	2 モーラ	2 モーラ	1 モーラ
CVN (e.g. [kan])			1 モーラ	
CVO (e.g. [kat])	1 モーラ	1 モーラ		
CV (e.g. [ka])			1 モーラ	

窪菌・本間（2002: 24）では、英語や東京方言が表 1 の A タイプに属し、鹿児島方言²が D タイプに属するとされている。本発表で扱う内之浦方言は、上述の通り鼻音を尾子音に持つ音節と摩擦音を尾子音に持つ音節の間に音節量の境界が引けることから、表 1 では B タイプに当てはまることが予想される。

3. アクセント型の揺れと音節量

本節では内之浦方言のアクセント体系の観察を通して、CVR 音節が CV 音節や CVO 音節と異なる振る舞いをし、CVV 音節と同じ振る舞いをするを示す。この観察に基づいて、内之浦方言の閉音節のうち CVO 音節は尾子音がモーラを担わない軽音節であり、CVR 音節は尾子音がモーラを担う重音節であると考える。

3.1. 短母音の開音節におけるアクセント型の揺れ

拡張語（＝語＋0 個以上の接語；下地 2018）の最終音節が CV 音節である場合に観察されるアクセント型を (5) に示す。ピッチの上昇を [で、下降を] で示す。

- (5) a. a[me]me ~ a[me]
ame
雨／飴（A型～B型）
- b. a[me]ga ~ ame[ga]
ame=ga
雨=主格／飴=主格（A型～B型）

高城（2020a）の一部を修正して掲載。

内之浦方言では「雨」、「雨が」など拡張語を単独で発音したときのアクセント型に揺れが見られ、拡張語の次末音節のみが高い型（以下、A 型）と最終音節のみが高い型（以下、B 型）の両方が観察される（高城 2020a, b）。なお、本発表における「A 型」、「B 型」、後述する「A' 型」はアクセント型の実現形を表しており、体系内において型の対立があることは含意しない。

3.2. 閉音節におけるアクセント型の揺れ

拡張語の最終音節が閉音節のうち (6a) のような CVO 音節である場合には、CV 音節である場合と同じく A 型と B 型のみが観察される。これに対して (6b) のような CVR 音節である場合には、A 型と B 型に加えて最終音節内部に下降がある型（以下、A' 型）も観察される（高城 2020a, b）。音節内部でのピッチの下降を]] で示す。

- (6) a. ki[mo]tsu? ~ kimo[tsu?
kimotut
肝付（A型～B型）
- b. ha[bak]kaj ~ habak[kaj ~ habak[kaj]]
ha=batkaj
葉=限定／歯=限定（A型～B型～A'型）

高城（2020a）の一部を修正して掲載。

(6a) と (6b) はどちらも拡張語の最終音節が閉音節であるにもかかわらず、A' 型の出現の有無という点に違いが観察される。拡張語の最終音節が閉音節であっても CVR 音節ではなく CVO 音節である場合には、CV 音節である場合と同じく A' 型が出現しない。

ここまでの観察で A' 型は上述の通り拡張語の最終音節が CVR 音節である場合という、音韻的に限られた環境においてのみ出現しており、A 型もしくは B 型の変種である可能性が高い。しかしながら、どちらの変種であるかを決定できる根拠は体系の内部では見つかっていない。高城（2020a, b）では、A 型

² 同一文献内にあるアクセント体系への言及（窪菌・本間 2002: 41）を踏まえると、鹿児島市とその周辺地域の方言を広く指しているものと考えられる。

と B 型の対立がある近隣の鹿児島県トカラ列島^{たいらじま}平島方言（木部 2000: 87-91）や鹿児島県市来・串木野^{いちききくしきの}方言（黒木 2018: 46, 48）において、A'型と本発表が呼んでいるアクセント型は A 型が予測される語彙のみに出現することを踏まえて、内之浦方言においても暫定的にこれを A 型の変種とみなしている。本発表でも A'型を A 型の変種とみなして議論を進める。(6b) における A 型と A'型の出現については特定の条件が見つかっておらず、自由変異であると考えられる。以下では、A 型と A'型をまとめて「下降型」と呼ぶこともある。なお、表 2 に示すように 1 音節 A 型では音節構造にかかわらず最終音節内部でピッチ下降が生じる（高城 2020 a, b）。このアクセント実現は、拡張語の最終音節が CVR 音節である場合には A'型の実現として予測されるものと一致するため、内之浦方言において A'型の実現を確認するためには 2 音節以上の拡張語を観察する必要がある。

表 2 内之浦方言のアクセント実現（1 音節）

A 型	B 型
CV]]	[CV
CVO]]	[CVO
CVR]]	[CVR

3.3. 長母音を含む音節におけるアクセント型の揺れ

第 2 節で述べた通り、内之浦方言では鼻音を尾子音に持つ音節と摩擦音を尾子音に持つ音節の間に音節量の境界を引くことができる。すなわち長母音を含む音節（以下、CVV 音節）や二重母音を含む音節が CVR 音節と同じ振る舞いをするのであれば、この三者は 2 モーラを担う重音節であると解釈できる。この場合、内之浦方言は表 1 の B タイプに分類されることになる。但し、二重母音は内之浦方言では認められないため、以下では CVV 音節についてのみ言及する。なお、本発表において CVR 音節と分析している構造の一部が今後の調査により二重母音を含む音節と認められるようになる可能性は否定できないが、本発表の結論には影響を与えない。

内之浦方言には長母音と短母音の区別自体は存在するものの、現時点で観察できている CVV 音節の数は非常に限定的である。拡張語の最終音節が CVV 音節である場合における下降型の揺れは (7) に示す外来語 2 例で確認できる。

- (7) ko:[su]ta: ~ ko:su[ta:] to:[su]ta: ~ to:su[ta:]
 koosutaa toosutaa
 コースター（A型～A'型） トースター（A型～A'型）

(7) の 2 例のみに基づいて結論を出すことは早計であり、最終音節が CVV 音節である 2 音節以上の和語や漢語などの調査も必要ではあるが、CVV 音節が CVR 音節と同じく A'型の出現を許す可能性があることは指摘できる。CVV 音節が CVR 音節と同じく重音節であるとする予測は、第 2 節で示した Hayes (1995: 120) の一般化や、(4) に示した聞こえ度の階層にも矛盾しないものである。そこで本発表では暫定的に CVV 音節も重音節であると考えられる。

3.4. A'型の出現と音節量

以上の観察から、A'型の出現に関して CV 音節と同じ振る舞いをする **CVO 音節は尾子音がモーラを担わない軽音節**であり、CV 音節と異なる振る舞いをして CVV 音節と同じ振る舞いをする **CVR 音節は尾子音がモーラを担う重音節**であると考えられる。本節で述べた内之浦方言のアクセント実現を音節構造別に表 3 に示す。ここでは次末音節と最終音節のみを表示する。なお、CVV 音節に関する十分な調

査結果が得られていないことから、以下では重音節を CVR 音節で代表させる。X は任意の音素を表し、「.」は音節境界を表す。

表 3 内之浦方言のアクセント実現 (2 音節以上)

A 型	A'型	B 型
...[CV(X)]. CV		...CV(X). [CV
...[CV(X)]. CVO		...CV(X). [CVO
...[CV(X)]. CVR	...CV(X). [CVR]]	...CV(X). [CVR

表 3 からわかる通り尾子音のみが高音調を担う (8) のような例は観察されていない。

- (8) a. *...CV[R]. CV(O) b. *...CV(X). CV[R]

(8a) のような例がないことは、次末音節の音節構造がアクセント実現に影響しないことを示している。CVR 音節が最終音節にある場合には音節内部での下降が見られるのに対して、次末音節にある場合には CV 音節や CVO 音節と同様に音節全体で高音調を担う。このことから、尾子音が単独では高音調を担わない、もしくは音節内でのピッチ上昇が許されないという制約の存在が示唆される。これは (8b) のような例が観察されていないこととも並行的に考えられる。

4. 議論

第 4.1 節では第 3 節における観察を共時的な視点で整理する。第 4.2 節では下降型に揺れがあることについて第 4.1 節の議論を踏まえて通時的に検討し、内之浦方言において音節量の変化が進行中であることを主張する。

4.1. 共時的分析

第 2 節に挙げた先行研究と第 3 節の記述に基づくと、内之浦方言と同じ音節構造を持つ任意の言語に存在する軽音節と重音節の組み合わせとして少なくとも (9) のような 3 種類が想定可能である。

- (9) a.

軽	重
CV	CVO, CVR

 b.

軽	重
CV, CVO	CVR

 c.

軽	重
CV, CVO, CVR	/
- (軽=軽音節、重=重音節)

窪菌・本間 (2002: 24) の記述を踏まえると、(9a) の体系には東京方言、(9c) の体系には鹿児島 (市) 方言が該当する。但し田中 (2008: 181–212) によると、東京方言ではアクセントや最小語制約など複数の音韻論的現象において、(9b) のように音節量の境界が CVO 音節と CVR 音節の間に引かれることもある。東京方言のように音節量の境界が同一言語内において複数見られる場合があることは Zec (1995) などにおいても指摘されている。

第 3 節で見たアクセントの現象も、田中 (2008) による東京方言の観察と同じく、内之浦方言が (少なくとも上記の現象においては) (9b) の体系を持つことを示している。すなわち**共時的に A'型の出現が許容されるか否かという点で、閉音節が 2 種類に区分される。**

一方で (8) に示したように内之浦方言のアクセント体系には、尾子音が単独では高音調を担わない、もしくは音節内でのピッチ上昇が許されないという制約があることが示唆される。「A'型の出現が許容

されるか」という基準では上記のように閉音節を 2 種類に区分できるのに対し、「尾子音が単独で高音調を担うか」という基準では積極的に区分する根拠はない。後者の基準において「CVR 音節が重音節である証拠が見つからない」ということを根拠に、東京方言と同じく「音節量の境界が複数見られる」と捉えてよいのか、もしくは「音節量の違いに影響されない現象もある」と捉えた方がよいのかという点は今後の課題とする。

4.2. 通時的分析

内之浦方言のアクセント体系に見られる下降型の揺れは CVR 音節において尾子音がモーラを担うか否か、換言すると CVR 音節が (9b) のように重音節として振る舞うか、(9c) のように軽音節として振る舞うかという揺れとしても捉えることができる。近隣の鹿児島市方言 (木部 2000) が A 型と A' 型のうち A 型のみを持つことを考慮すると、片方が古い型でもう片方が新しい型であると考えられる。ここで仮に、CVR 音節を最終音節に持つ拡張語に下降型の揺れがない点でのみ内之浦方言と異なる 2 つの体系 (10a, b) を考える。

- (10) a. CVR音節を最終音節に持つ拡張語に、A'型が出現しA型が出現しない体系
 b. CVR音節を最終音節に持つ拡張語に、A型が出現しA'型が出現しない体系

(10a) では CVR 音節が (9b) のように CVO 音節と異なる振る舞いをしていることになる。一方で、(10b) では CVR 音節が (9c) のように CVO 音節と同じ振る舞いをしていることになる。内之浦方言は CVR 音節を最終音節に持つ拡張語に下降型の揺れがある体系であるから、両体系の間にあると考えられる。したがって通時的には (10a) の体系から (10b) の体系、もしくは反対に (10b) の体系から (10a) の体系への変化の途中にあると解釈できる。

第 3 節で示した内之浦方言のアクセント実現に基づく、(10a) と (10b) の下降型のアクセント実現は表 4 のように仮定できる。「○」は 1 モーラを表す。ここでも次末音節と最終音節のみを表示する。

表 4 (10a) と (10b) における下降型のアクセント実現 (仮定)

最終音節の 音節構造	(10a) のアクセント実現		(10b) のアクセント実現
	次末音節：軽	次末音節：重	
a. CV	...[○]. ○	...[○○]. ○	...[○]. ○
b. CVO			
c. CVR		...○. [○○]]	

(10a) では最終音節の軽重によってアクセント実現が異なる。これに対して (10b) では音節量の対立がなくすべてのアクセント実現が同じである。音節量の対立がない (10b) では「○」が 1 音節を表すと考えても問題ない。(10a) と (10b) はそれぞれ (11a) と (11b) のように記述できる。

- (11) a. 拡張語の次末モーラを含む音節のみが高い
 b. 拡張語の次末音節のみが高い

すなわち (10a) はモーラでアクセントの位置を数え音節でアクセントを担う体系であり、(10b) は音節でアクセントの位置を数え音節でアクセントを担う体系である。

これを受けて、上で観察した A 型と A' 型の揺れが仮に (10a) から (10b) への変化を表しているのであれば、アクセントの位置を数える単位のモーラから音節への変化が生じていると考えることができる。

反対に (10b) から (10a) への変化を表しているのであれば、アクセントの位置を数える単位の音節からモーラへの変化が生じていると考えることになる。後者の場合、それまで音節のみを参照する体系だったのが、アクセントの位置を数える単位として新しくモーラも参照する体系へと変化したということになる。しかしながら、アクセントの位置を数えるという特定の現象でのみモーラが用いられるようになった動機が現時点で未解明である。したがって、現段階では前者の (10a) から (10b) への変化と捉えるのが妥当である。これは **CVR 音節が重音節として振る舞う (9b) の体系から、軽音節として振る舞う (9c) の体系への変化**としても捉えることができる。

窪蘭 (2019) は、鹿児島県甌島方言のアクセント体系の観察に基づいて「九州西南部 2 型アクセント」の歴史の変遷を推定し、「音節基調」の体系が「モーラ基調」の体系より新しい体系であると述べている。窪蘭 (2019: 364) によるとモーラを基調とする体系である甌島平良方言では、(12) のように「特殊拍だけが強く発音される有標な構造」を避けるための方策として「High tone spreading」が用いられ、これにより「音節全体で High tone を担う」という。

(12) プ[ー]ル→[プー]ル パ[ン]ツ→[パン]ツ ミカ[ノ]ミ[カン] 窪蘭 (2019: 364)

窪蘭 (2019) はここで用いられている High tone spreading が「通言語的に一般性の高い規則であることを考慮し、「この規則によってモーラの体系が音節をも用いる体系へと変化したと見ることができると述べている。この推定からも、本発表で示した A 型と A' 型の揺れが音節量の変化を示していることに加え、アクセントの位置を数える単位の**モーラから音節への変化**を示していることが支持される。

5. 結論

本発表では、アクセント体系の観察に基づいて内之浦方言の閉音節が音韻論的に 2 種類に区分できることを示した。その上で、内之浦方言において音節量の変化が進行中であることを主張し、アクセント型の揺れがアクセントの位置を数える単位のモーラから音節への変化を示している可能性を指摘した。

従来、鹿児島市を中心とする地域の方言研究においては音節の役割が強調されてきた反面、モーラの存在について論じられることは少なかった。内之浦方言におけるモーラについて扱った本研究は、九州西南部方言の音節を基調とする体系がモーラを基調とする体系から生じたものであるとする窪蘭 (2019) の仮説に対して示唆を与えるものであり、日本語方言の通時的研究に貢献するものである。

参考文献

- Hayes, Bruce (1995) *Metrical Stress Theory: Principles and Case Studies*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』東京：勉誠出版。
- 窪蘭晴夫 (2019) 「甌島方言のアクセント」『日本語学会第159回大会予稿集』362–367.
- 窪蘭晴夫・本間猛 (2002) 『音節とモーラ』, 英語学モノグラフシリーズ15, 東京：研究社.
- 黒木邦彦 (2018) 「市来・串木野方言の静態化体系」岡崎友子・衣畑智秀・藤本真理子・森勇太 (編) 『バリエーションの中の日本語史』東京：くろしお出版.
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』, シリーズ記述文法1, 東京：くろしお出版.
- 高城隆一 (2019) 「鹿児島県肝付町内之浦方言の音節末摩擦音」『東京大学言語学論集』41(eTULIP): e85–e95.
- 高城隆一 (2020a) 「弁別機能を持たない二型アクセント：鹿児島県大隅半島内之浦方言」『日本方言研究会第110回研究発表会発表原稿集』17–24.
- 高城隆一 (2020b) 「鹿児島県大隅半島内之浦方言における二型アクセントの痕跡」『東京大学言語学論集』42: 267–282.
- 田中真一 (2008) 『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京：くろしお出版.
- Zec, Draga (1995) The role of moraic structure in the distribution of segments within syllables. In: Jacques Durand and Francis Katamba (eds.) *Frontiers of Phonology: Atoms, Structures, Derivations*, Longman Linguistics Library. 149–179. New York: Routledge.